

パカッと開けたら

湯本 千穂

「わー、光る剣が、きゅうりと人參でできています。」
 パカッと開けたお弁当に私の大好きなキャラクターがつま
 っている。カレーピラフは金色のロボットに変身しているし、
 そのお友だちのロボットはゆで卵とりのりでできている。まっ
 茶のむしパンは映画にでてきたパンにそっくりだ。

「お母さんすごいな。しかもおいしい。」

今日は宿泊学習にきている。私は宿泊学習が大好きだ。毎年
 スキーなんだけれども、全然あきない。それともう一つ楽し
 みがある。それは、お弁当だ。ふだんは給食だから年に数回し
 か食べられないお母さんのお弁当。だから、とつても楽し
 なのだ。前日の夜は、お弁当を楽しみにしながら、わくわく
 する。朝とび起きると、お弁当は出来あがっているようだっ
 た。

「お弁当は朝だけで作ったの？」

と聞くと、

「そうだよ。」

とお母さんは答えた。お母さんはいったいいつねているの
 だろう。

「お弁当、夜に作ればいいのに。」

「それはむりだよ。いたんじょうし、おいしくないもの。」

とお母さんはいっこり言った。お母さんはまほう使いみたい
 だな、と思った。お母さんはお仕事がいそがしいのに、いっ

いつこのメニューを考えたのだろう……。それに、いつ買い物
 に行ったのだろう……。お弁当の中身が気になったし、ふたをし
 めていないようだったので、ふたを持ってお弁当に近づくと、
 「今、さましているから、ふたはしめないで。それに中身はお
 昼までのお楽しみだよ。」

「どうしてふたをしめてはいけないの。」

「中身があなたにかいままふたをすると、おかずがいたんで
 しまうからね。スキー中にお腹がいたくなったらこまるで
 しょ。」

なるほどなと思った。そして、いろいろなことを知っている
 なとも思った。ふとお母さんに目をやると、急いで顔を洗い、
 ハンガーをガチャガチャしながら仕事に着ていく洋服をえら
 んでいた。

行きのバスの中でお弁当を食べながら、朝お弁当をのぞか
 なくてよかつたなと思った。お母さん、今ごろお仕事でねむく
 なっていないかな。私はちよっぴり心配になった。お母さんは
 お弁当みたいだな。いつもはお弁当のキャラクターみたいに見
 るくて、楽しいのだけれど、見えないところで私のことを心配
 してくれたり、がんばってくれている。帰ったら、スキーの話を
 たくさんしてあげよう。空になったお弁当箱をみつめながら、
 「お母さんありがとう。」

私はつぶやいた。